

Insight みどりのフカヨミ

話題になったあのコトこのコトをその後の情報とともに深く読み解きます。

生物文化多様性 ～自然と人間のつながりの豊かさ～

■ グローバル化した産業社会の未来

新型コロナウイルス感染症などのパンデミック（世界的大流行）、温室効果ガスの排出による気候変動、どちらも現代のグローバル化した産業社会をゆるがす出来事です。こうしたなかで、自然と人間とのかかわりの未来をどのように考えていけばよいのでしょうか。このことについて考えるための手がかりのひとつになるのが、「生物文化多様性」(biocultural diversity)ということばです。

■ 生物・言語・文化の多様性

生物多様性は地球上にさまざまな自然環境をつくりだしています。そのさまざまな地域で、人間は多様な文化を営んでいます。言語の多様性はこの文化多様性のわかりやすい尺度です。これら生物・言語・文化の多様性のあいだのつながりから、世界の人びとの暮らしの多様性が生まれています。このつながりの多様性が、生物文化多様性です。

外国を旅すると、言語、服装、しぐさ、食事、家のつくりなど、文化のちがいを意識する場面に出会います。自然界のとらえ方や自然とのかかわりのあり方にも、それぞれの文化に特有の側面があります。ラオスの古都ルアンパバーンにある仏教寺院ワットシェントーンの壁面には、「黄金の木」とよばれる図柄があります（写真1）。この地にかつてあった巨木とともに、仏や人々、



写真1. ラオスの古都ルアンパバーンの仏教寺院ワットシェントーンの「黄金の木」

さまざまな鳥や獣、ハチの巣、半人半鳥などが描かれ、世界遺産になっているこの古都を育んだ文化とその固有の自然観を垣間みることができます。

■ 時代とともに変わる自然と文化のつながり

自然と文化のかかわりは、時代とともに変わります。生物文化多様性の原初の姿は、アフリカで誕生したホモ・サピエンスが狩猟採集民として世界に広がるなかで形成されたのでしょうか。侵略と征服、交易などの歴史を通じて諸文化は混ざり合い、また新しい文化を生み出しました。近現代の産業社会化とグローバル化は、消費文化の均一化をもたらしているといわれ、世界の言語の数は16世紀初頭の14,500から21世紀初頭の2,997に減少したとの推定もあります。

『万葉集』で詠われた秋の七草は、身近な野の花として古来親しまれてきました。しかし牛馬のえさや田畑の肥料、屋根の茅などとして草をつかう生活がなくなり、野の風景が姿を消すと、キキョウやカワラナデシコも消えました。しかし今でも伝統的な火入れや草刈りのつづけられている木曾町開田高原には、こうした花々が残っています（写真2・3）。



写真2. キキョウ



写真3. カワラナデシコ

■ 生物文化多様性は知恵の宝庫

人間社会は、文化を通して地域の自然とのかかわりません。グローバルな資源利用に依存する現代の産業社会では、地域の自然とのかかわりが希薄になります。自然とのかかわる文化は、地域社会に柔軟な回復力（レジリエンス）をもたらすともいわれます。文化は社会の創造性の源です。持続可能な分散型の地域社会づくりを考え、地域の自然とつながり直そうとすると、生物文化多様性はその知恵の宝庫になるのでしょうか。

（須賀 丈／自然環境部）

